# 和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報

- 平成17年度 (2005年度)-

2 0 0 8

財団法人 和歌山市都市整備公社

## 序 文

本書は、財団法人和歌山市文化体育振興事業団が平成17年度(2005年度)に行った和歌山市内の遺跡発掘調査の概要をまとめたものです。

調査の結果、太田・黒田遺跡第58次調査で弥生時代前期の環濠の痕跡を確認しました。さらに、井辺遺跡弥生時代中期の土坑を検出し、井辺集落の始まる時期を遡らせて考える必要が出てきました。また、太田・黒田遺跡では遺跡北半部において、古墳時代初頭の大溝をはじめ、多くの遺構を検出し、古墳時代の集落の状況を知ることができました。西庄遺跡では、遺跡北半部で調査を行い、掘立柱建物や柱列、竪穴住居の可能性のある遺構を検出し、集落範囲が遺跡北部に広がっていることを確認しました。

以上、調査による新たな調査成果は、郷土の歴史を語る上でなくてはならない重要な視点を与えることになりました。本書が私たちの郷土に関する歴史知識を豊かにすることを願ってやみません。

発掘調査にあたって御協力をいただいた地元の皆様及び本書編集にあたり種々の 御教示を賜りました方々に厚く御礼申し上げます。

平成 20 年 2 月 12 日

財団法人 和歌山市都市整備公社 理事長 武 内 切

## 例 言

- 1. 本書は、平成17年度(2005年度)に財団法人和歌山市文化体育振興事業団が実施した和歌山市内における埋蔵文化財発掘調査事業の概要を掲載する。なお、本書作成に際して、財団法人和歌山市文化体育振興事業団から埋蔵文化財業務を引き継いだ財団法人和歌山市都市整備公社が原稿の作成を行ったものである。
- 2. 本書に掲載の調査については、既に報告書が刊行されたものもある。未完のものについては報告書が刊行された際に、その報告をもって正式報告とする。
- 3. 本書の執筆については、執筆分担の文責を文末に記載し、編集は北野隆亮が行った。
- 4. 埋蔵文化財発掘調査及び本年報作成を行った担当者は以下の通りである。

#### 埋蔵文化財発掘調査

【平成17年度(2005年度)】

財団法人和歌山市文化体育振興事業団

総務課

学芸員 北野隆亮

学芸員 井馬好英

学芸員 奥村 薫

学芸員 藤藪勝則

#### 年報作成

【平成19年度(2007年度)】

財団法人和歌山市都市整備公社

事務局 埋蔵文化財班

班 長 北野隆亮

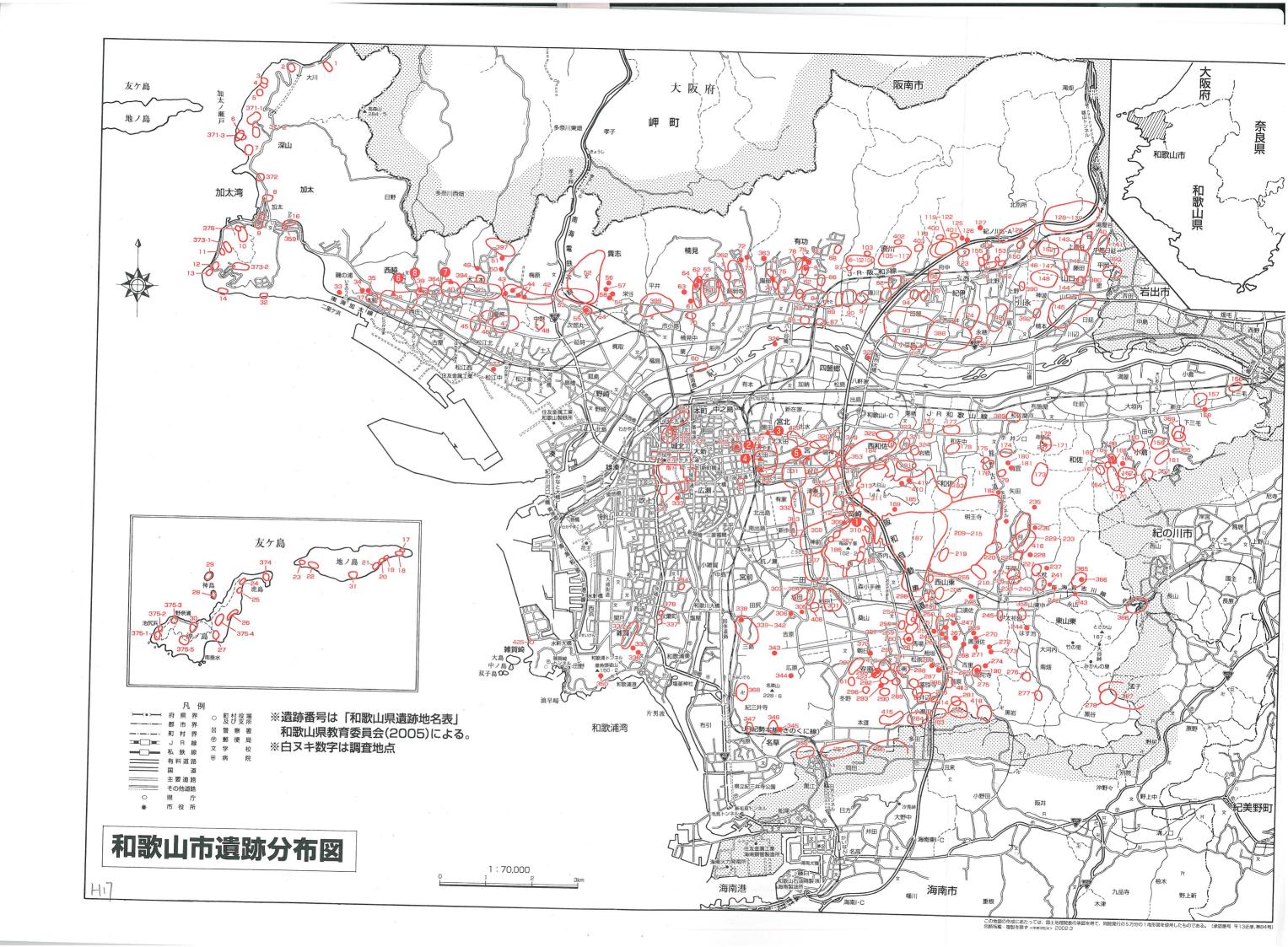
学芸員 井馬好英

学芸員 奥村 薫

学芸員 藤藪勝則

# 本 文 目 次

I. はじめに
平成 17 年度(2005 年度)の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
Ⅱ. 埋蔵文化財の発掘調査概要
1. 井辺遺跡第7次調査2
2. 太田・黒田遺跡第 56 次調査4
3. 太田・黒田遺跡第 57 次調査10
4. 太田・黒田遺跡第 58 次調査12
5. 鳴神V遺跡第9次調査 ······18
6. 西庄遺跡第4次確認調査20
7. 木ノ本 I 遺跡第 2 次試掘調査22
8. 平の下遺跡第2次確認調査24
Ⅲ. 遺物整理報告等
1. 史跡和歌山城第 12 次調査26
2. 太田・黒田遺跡第 53 次調査30
Ⅳ. 普及啓発活動



# 和歌山市遺跡地名表(「和歌山県遺跡地名表」和歌山県教育委員会 < 2005年 > より作成。) 4・7

遺跡番号	名 称	遺跡番号	 名 称	遺跡番号	名称	遺跡番号	名	称	遺跡番号	名 称	遺跡番号	名称	遺跡番号	名 称	遺跡番号	名 称
1	報恩講寺遺跡		城 山 古 墳	_	直川八幡山古墳群			跡	261	馬場遺跡	310	森小手穂埴輪窯跡	362	鳴 滝 遺 跡	398	府 中 IV 遺 跡
2	大川西方遺跡	50	権現山1号墳	118	八王寺山古墳群	175	禰 宜 Ⅱ 遺	跡	262 ~ 265	東池古墳群	311	大日山I遺跡	363	園部円山古墳	399	平 井 遺 跡
3	藻 江 遺 跡	51	権現山2号墳	119	橘谷I遺跡	176	禰 宜 貝	塚	266	吉里銅鐸出土地	312	井 辺 Ⅰ 遺 跡	364	西 庄 Ⅱ 遺 跡	400	深谷池北遺跡
4	しょうぶ谷遺跡	52	高 芝 遺 跡	120	橘谷Ⅱ遺跡	177	河南中学校北方	遺跡	267	小 山 古 墳	313	井 辺 Ⅱ 遺 跡	365	永 山 遺 跡	401	名 草 池 北 遺 跡
5	水 谷 遺 跡	53	高 芝 古 墳 群	121	橘 谷 Ⅲ 遺 跡	178	和佐中遺	跡	268	奥 須 佐 窯 跡	314	鳴 神 Ⅱ 遺 跡	366	永 山 古 墳	402	湯谷池西遺跡
6	男良の谷遺跡	54	栄 谷 貝 塚	122	橘谷銅鐸出土地	179	和 佐 寺	跡	269	円 満 寺 古 墳	315	鳴 神 Ⅲ 遺 跡	367	井 辺 皿 遺 跡	403	平野池南遺跡
7	深 山 遺 跡	55	貴 志 古 墳	123	弘 西 遺 跡	180 • 181	禰宜古墳	群	270	峯 古 墳	316	鳴神IV遺跡	368	紀三井寺遺跡	404	北野池北遺跡
8	大 谷 川 遺 跡	56	川原崎遺跡	124	北田井遺跡	182	和 坂 古	墳	271	西 光 寺 窯 地	317	鳴神貝塚	369	奥 山 田 遺 跡	405	山 吹 丁 遺 跡
9	加 太 遺 跡	57 ~ 59	川原崎古墳群	125 ~ 127	別所古墳群	183	和佐古墳	群	272	吉里1号窯跡	318	鳴神V遺跡	370	朝日石槍出土地	406	友 田 町 遺 跡
10	加 太 南 遺 跡	60	国 有 本 遺 跡	128	上 野 古 墳 群	184	花山古墳	群	273	吉里2号窯跡	319	音 浦 遺 跡	371	深山要塞跡	407	津湊Ⅱ遺跡
11	平 の 谷 遺 跡	61	大 谷 古 墳	129 ~ 139	山口古墳群	185	岩橋千塚古	墳 群	274	頭陀寺古墳	320	鳴神VI遺跡	371 – 1		408	和 田 Ⅱ 遺 跡
12	田倉崎Ⅰ遺跡	62.64.65	晒山古墳群	140	山口廃寺跡	186	井辺前山古	墳 群	275	頭陀寺遺跡	321		371 – 2	深山第2砲台跡	409	岩橋Ⅲ遺跡
13	田倉崎Ⅱ遺跡	63	慶円寺裏山古墳	141	中筋日延遺跡		寺内古墳		276	大 将 軍 窯 跡	322	21. 12.	371~3		410	前山 B 226 号墳
14	船 出 遺 跡	66	雨が谷古墳群	142	山口遺跡		森小手穂		277	有 ノ 木 窯 跡	323	栗 栖 Ⅱ 遺 跡	372	加太砲台跡	411	前山B227号墳
16	加太駅北方遺跡	70	楠 見 遺 跡	143	谷 遺 跡		寺内ナイフ形石器		278	宝 光 寺 跡	324	高橋神社遺跡			412	城 丿 前 1 号 墳
17	藻崎北浜遺跡	71	鳴滝古墳群	144	里遗跡		頭陀寺ナイフ形石器		279 • 280	松原古墳群	325	紀の川銅鐸出土地	374	虎島砲台跡	413	境原遺跡
18	藻崎南浜遺跡	72	奥 出 古 墳	145			山東古墳		281	滝ヶ峯古墳群	326	有本銅鐸出土地	375	友ヶ島要塞跡	414	薬 勝 寺 Ⅱ 遺 跡
19	藻崎西方遺跡	73	有 功 経 塚	146	藤田古墳		若林古墳		282	滝ヶ峯遺跡	327	太田・黒田遺跡			415	本渡遺跡
20	神前東浜遺跡	74	園 部 I 遺 跡	147	一路 古墳		吉礼砂羅谷		283	薬勝寺南山古墳群	328			友ヶ島第2砲台跡	416	明王寺遺跡
21	神前西浜遺跡	75	園部古墳	148				群	284	仁 井 辺 遺 跡	329			友ヶ島第3砲台跡	417	平尾遺跡
22	屋敷浜遺跡	76	園部Ⅱ遺跡		宇田森遺跡		楠古墳	群 来	285	薬勝寺跡	330			友ヶ島第4砲台跡 友ヶ島第5砲台跡	418	太田城水攻め堤跡
23	おそ越の鼻遺跡	77	有功遺跡	150	上野廃寺跡(紀伊薬師寺跡)		足守神社古		286	薬 勝 寺 遺 跡 松 原 I 遺 跡	331	秋     月     遺     跡       津     湊     遺     跡	376	大田 東 遺 跡	420	木 広 町 遺 跡
24	一色谷遺跡	78	池田遺跡有功古墳	151	上 野 遺 跡   	$228$ $229 \sim 233$	赤山古塩谷古墳	墳群	287 288	松 原 I 遺 跡 松 原 Ⅱ 遺 跡	333	岡の里遺跡	377	松江経塚	422	朝日蔵骨器出土地
25	柏の浜遺跡深蛇池遺跡		有 功 古 墳   大 同 寺 墳 墓	152 153	上 黒 谷 遺 跡     -   北 野 窯 跡		新出古	墳	289	薬師谷遺跡	334	関戸遺跡	378	祝 口 石 岩 陰 遺 跡	指1	史跡和歌山城
26	- 1 346 445		大同寺古墳		北野遺跡		明王寺経		290	江南遺跡	335	関戸古墳	379	和歌山城跡	10.7	2 53 11 11 11 19
28	垂 水 遺 跡 神 島 遺 跡		大同寺遺跡				矢 田 古		1	曽垣田遺跡		天神山古墳		山口御殿跡	,	
29	沖の島北方海底遺跡	1	法然寺遺跡	1	若宮池遺跡		北池古	墳	292	曽垣田Ⅱ遺跡		秋葉山貝塚	381	日岩橋Ⅱ遺跡		
30	野奈浦遺跡		六十谷遺跡		A		殿山古墳		293	曾 垣 田 古 墳		アンドの鼻古墳	382	本 願 寺 跡		
31	ハイブの浦遺跡	85	和田遺跡		下三毛遺跡		土井山古		294			三田古墳群	383	神 前 Ⅱ 遺 跡		
32	浜 遺 跡	86	西 辻 遺 跡		小 山 古 墳		丸山古	墳	295	城の前Ⅰ遺跡	343	吉 原 古 墳	384	高松焼窯跡		-
1	磯の浦古墳群		川口遺跡		寺 山 古 墳 群		高 岡 古		296	大 池 遺 跡	344	広 原 古 墳	385	奥山田古墳群		
37	磯脇遺跡		六十谷古墳群		東国山古墳群		桜 山 古		297	赤津古墳群	345	内 原 古 墳	386	大 池 遺 跡		
38	西 庄 遺 跡	89	直川遺跡	1 200	宮山古墳群	245	伊太祈曽神社さ	<b></b> 墳群	298	吉礼貝塚	346	内 原 遺 跡	387	大 旗 山 城 跡		
39	平の下遺跡	90	直川廃寺跡(明光寺跡)	162 · 163	小倉古墳群	246	チショさ	ī 墳	299	西吉礼遺跡	347	名 草 貝 塚	388	西田井遺跡		-
40	木ノ本Ⅰ遺跡	91	高 井 遺 跡	164	明楽古墳群	247 ~ 249	城ヶ森古り	賁 群	300	東吉礼遺跡	350	高津子山古墳	389	井ノ口遺跡		
41	木ノ本Ⅱ遺跡	92	鳥 井 遺 跡	165 • 166	小倉神社古墳群	250	城ヶ森遺	<b>跡</b>	301	和 田 遺 跡	352	金谷廃寺跡	390	神 波 遺 跡		· ·
42	木ノ本皿遺跡	93	田 屋 遺 跡	167	モント古墳群	251	相 坂 古	墳	302	和田岩坪遺跡	353	興 徳 寺 跡	391	永 穂 遺 跡		9 9
43	木ノ本経塚	94	府 中 Ⅱ 遺 跡	168	小倉神社境内遺跡	252 · 253	千石山古	賁 群	303.304	和田古墳群	356	太田城跡	392	楠 本 遺 跡		
44	釜 山 古 墳 群	95	府 中 Ⅲ 遺 跡	169	金 谷 遺 跡	254	菖 蒲 谷 遺	跡	305	竈山神社古墳	357	山崎山古墳群	393	吉 田 遺 跡		
45	木本小学校I遺跡	96	府 中 遺 跡	170	奥 池 遺 跡	255	吉 礼 皿 遺	<b>跡</b>	306	坂田地蔵山古墳	358	山 東 中 遺 跡	394	城 山 遺 跡		
46	木ノ本小学校Ⅱ遺跡	97	北 山 I 遺 跡	171	高積山遺跡	256	千 石 山 遺	<b>跡</b>	307	神 前 遺 跡	359	加太Ⅱ遺跡	395	岡 村 遺 跡		
47	榎 原 遺 跡	98 ~ 102 · 104	北 山 古 墳 群	172	薬 徳 寺 跡	257 ~ 259	井 戸 古 墳	群	308	井 辺 遺 跡	360	雨 が 谷 遺 跡	396	室山古墳群		
48	中 野 遺 跡	103	北 山 Ⅱ 遺 跡	173	城ヶ峯城跡	260	馬場古墳	黄 群	309	岡崎縄文遺跡	361	冬 野 遺 跡	397	木ノ本IV遺跡		

## I. はじめに

### 平成17年度(2005年度)の調査

和歌山市における平成 17 年度 (2005 年度) の財団法人和歌山市文化体育振興事業団 (平成 18 年 3 月末日解散) の発掘調査受託事業は 8 件である。

調査に至った原因としては、店舗建設などの民間受託が3件に対して遺跡範囲確認調査などの公 共的な調査が5件を数え、前年度に比べると民間受託が減少傾向にあるといえる。

公共関係の調査では太田・黒田遺跡や西庄遺跡などの試掘・確認調査を行なった。

これらの調査で、いくつかの重要な成果が得られているので以下にまとめることとする。

#### 弥生時代

弥生時代については、太田・黒田遺跡第58次調査で弥生時代前期の環濠(二重環濠のうち外環濠に相当する)の痕跡を確認した。また井辺遺跡第7次調査において弥生時代後期から古墳時代初頭の竪穴住居を8棟検出したことから、昨年の第6次調査の成果と合わせ、調査地周辺がこの時期の集落の中心部であることが明らかとなった。また、弥生時代中期の土坑を検出したことから、遺跡の形成時期が遡る可能性があることを指摘した。

#### 古墳時代

古墳時代の調査としては太田・黒田遺跡第 56 次調査で古墳時代初頭の大溝をはじめとする遺構を検出し、集落の状況を一部確認することができた。

#### 鎌倉時代

平の下遺跡第2次調査で土坑を検出した。

#### 江戸時代

太田・黒田遺跡第 58 次調査で江戸時代後期の粘土採掘坑と大溝を検出した他、鳴神 V 遺跡第 9 次調査で江戸時代後期の河道を検出した。

#### 【2005年度調査一覧表】

番号	調査名	原 因	調查期間	面積(m²)	調 査 概 要	担当者名
1	井辺遺跡第7次	マンション建設	4~5月	108	井辺遺跡の形成時期が弥生時代中期に遡る 可能性があることや、集落形成の中心時期 は古墳時代初頭であり、集落の中心は遺跡 北東部にある可能性を確認した。	藤藪
2	太田・黒田遺跡第 56 次	マンション建設	6~7月	60	古墳時代初頭の大溝を初め古墳時代の集落 の一部を確認した。	井馬
3	太田・黒田遺跡第 57 次	マンション建設	6月	40.8	本調査地は遺跡の範囲外であることを確認 した。	北野
4	太田・黒田遺跡第 58 次	マンション建設	6月	59	弥生時代前期の環濠の痕跡、また江戸時代 後期の粘土採掘坑等を検出した。	藤藪
5	鳴神V遺跡第9次	個人住宅建設	6~7月	68	江戸時代後期に埋没した河道などを検出	奥村
6	西庄遺跡第4次	宅地造成	9月	82.6	6世紀代の生活域が本調査地まで及んでいることを確認した。	井馬・藤藪
7	木ノ本 I 遺跡第2次	宅地造成	11月	134	遺跡範囲が北側に展開することを確認した。	奥村
8	平の下遺跡第2次	宅地造成	12月	223	鎌倉時代の土坑などを検出した。	井馬・藤藪

## Ⅱ. 埋蔵文化財の発掘調査概要

## 1. 井辺遺跡第7次調査

調 査 地 和歌山市井辺 112・113 番地 調査面積 108 ㎡

#### 位置と環境

井辺遺跡は、岩橋丘陵西麓のなかでも福飯ヶ峰を主峰とする独立丘陵を背後に背負い、北西に開けた標高約3m前後を測る好適地に立地する。

周辺の遺跡について概観すると、当遺跡の南東部、岡崎団地付近に所在する岡崎縄文遺跡では、縄文時代の遺物包含層や貝層が確認され、縄文時代後期中頃から晩期までの土器のほか、石鏃や石斧、石錘などが出土している。また当遺跡の南側に隣接する神前遺跡では、弥生時代前期の土坑や前期末から中期初頭のものとみられる水田と小畦畔のほか、弥生時代中期前葉の溝や後期の溝が検出されている。さらに当遺跡の背後にある井辺前山古墳群には、武人や力士、鳥や馬のほか、家や盾などを模した形象埴輪を多数樹立した井辺八幡山古墳が築造されている。また、神前遺跡では、中世の遺構として曲物桶を井筒として据えた鎌倉時代の石組井戸、さらに備前擂鉢、灰釉折縁皿、胎土目唐津皿、中国製染付皿などを出土した室町時代末期の溝などが検出されている。

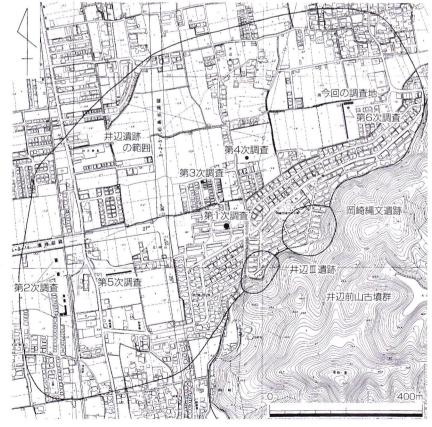
井辺遺跡では、これまでに過去 6 次を数える発掘調査が行われている。そのなかで第  $1 \cdot 3 \cdot 4$  次調査の成果から、遺跡の形成時期は弥生時代後期末であり、その盛行期は古墳時代初頭頃とされ

ている。また第6次調査 では、遺跡の北東部において弥生時代後期の竪穴 住居1棟や井戸1基のほか古墳時代初頭の竪穴住 居3棟などを検出している。

今回の第7次調査は、 調査対象地が第6次調査 地と同地内に位置するも のであり、第6次調査の 調査成果から判断して、 弥生時代後期から古墳時 代初頭の竪穴住居をはじ めとする遺構が多数検出 される可能性が考えられた。

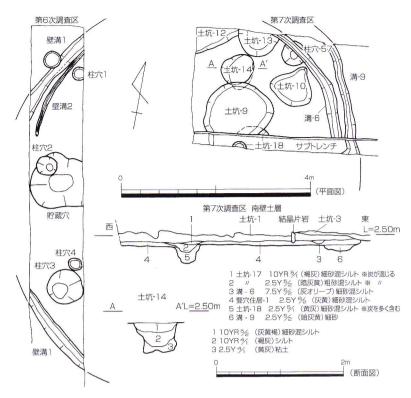
#### 調查内容

調査は、東西約30m、 南北約3.6mの東西に長



調査位置図

い調査区を設定し行った。今回の 調査では、宅地造成に伴う地盤改 良などにより堆積土の大部分が 除去されていたため、第4層上面 が遺構検出面となるものの、第 1・2層が残存する調査区壁面の 土層観察から、本来は第3層上面 が遺構検出面と考えられる。基本 層序は、第1・2層が現代の耕作 土とその床土であり、第3層は現 況で厚さ 22 cmを測る遺物包含層 である。また第4層は、黄灰色の シルトである。第4層以下の各層 (第5~6層) では、サブトレン チによる調査の結果、遺物を確認 することができなかった。特に第 6・7層は砂層であり湧水層であ



竪穴住居1 遺構平面図及び土層断面図

る。本調査では、第4層上面において弥生時代中期 の土坑1基や後期の竪穴住居1棟及びピットのほか 不定形な落ち込み、また弥生時代後期末から古墳時 代初頭の溝1条、さらに古墳時代初頭の竪穴住居4 棟をはじめ土坑や溝及びピットなど多数の遺構を検 出した。そのうち、竪穴住居1は、立て替えが行わ れた弥生時代後期の平面楕円形の竪穴住居である。 床面では、新旧2時期の壁溝や炉を検出した。

遺物は、各時代の遺構覆土や遺物包含層から収納コンテナ7箱分が出土した。これらの遺物には、弥



古墳時代初頭から前期の竪穴住居群(西から)

生時代中期から後期にかけての弥生土器をはじめ、土師器、製塩土器、中世土師器、瓦器、輸入陶磁器、国産陶磁器、瓦、有孔土錘、結晶片岩製の石錘及び砂岩製の叩石などがある。そのなかで特筆するべきものとしては、古墳時代前期に生駒山西麓から持ち運ばれた甕形土器の口縁部がある。

#### まとめ

今回の調査では、井辺遺跡の集落形成時期を示す遺構として弥生時代中期後半の土坑を1基確認することができた。また第6次調査に引き続き、弥生時代後期から古墳時代前期までの竪穴住居をはじめとする遺構を多数検出した。これらの遺構群の変遷から、集落形成の中心時期は弥生時代後期末から古墳時代初頭であり、調査地周辺は当該期集落の中心部であるものと考えられる。

(藤藪勝則)

### 2. 太田・黒田遺跡 第56次調査

調 査 地 和歌山市黒田  $102 - 3 \cdot 6 \sim 8$  番地 調査面積 約  $60 \text{ m}^{\circ}$ 

#### 位置と環境

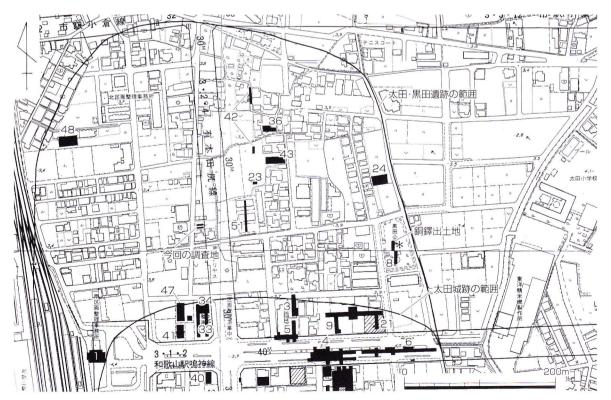
太田・黒田遺跡は、紀ノ川下流域南岸の和歌山平野ほぼ中央部に位置する JR 和歌山駅東側の和歌山市太田から黒田にかけて広がる遺跡で、平野部でも微高地にあたる地点に位置し、数多くの遺跡が分布する地域に所在する。この遺跡は、東西 500 m、南北 850 mの範囲をもち、この範囲内に太田城跡の範囲が含まれ複合遺跡としても周知されている。

今回の調査地は、太田・黒田遺跡の北半部に位置し、弥生時代前期環濠の一部の他、古墳時代前期の竪穴住居2棟及び後期の溝1条などを検出した第51次調査の西側約60mに位置する。

#### 調査内容

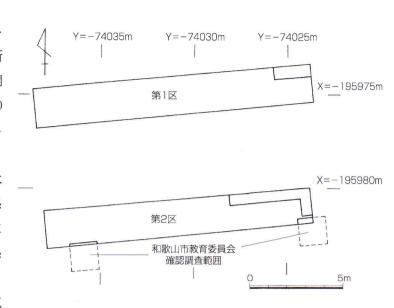
今回の調査は、マンション建設に伴うもので事前の確認調査を和歌山市教育委員会が行い、その結果、本発掘調査を財団法人和歌山市文化体育振興事業団が原因者から委託を受けて実施したものである。調査区は工事計画範囲の東半部に位置する2ヶ所の地点に設定し、北側に位置するものを第1区、南側に位置する調査区を第2区とした。第1・2区とも南北幅2m、東西長15mの調査区として設定したが、既存のマンホール等の配管及び和歌山市教育委員会の確認調査範囲との関係から第2区に関して東西長14.5mとした。

調査地の現況は、標高 3.40 m前後を測るアスファルト敷の駐車場で西から東にかけて緩やかに傾斜をもつ。アスファルト下には砕石や山土を用いた整地が行われており、その厚さは 20 ~ 30 cmで



調査位置図(数字番号は主たる既往の調査次数)

ある。また部分的にアスファルト 直下から掘り込まれた撹乱が各所 でみられた。整地土下には宅地開 発以前の水田耕土 (第1層) が10 ~15 cmの厚みで部分的に残存し ており、この水田面の標高は、 3.00 m前後である。第2層は、水 田耕土の床土に相当する黄褐色系 の土層で、部分的に上下2単位に 細分できた。第3層は、灰黄色系 の上下2単位に細分できるシルト 質土層で、江戸時代の平瓦が1点 出土したことから江戸時代の水田

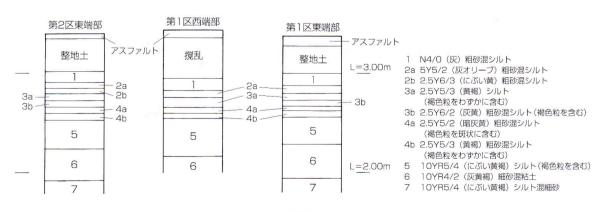


調査地区割図(トーン部分はサブトレンチ)

耕土と考えられる。第4層も上下2単位に細分できる土層で、瓦器や中世土師器を含むことから鎌倉時代の遺物包含層と考えられる。この第4層の下面(標高2.55 m前後)が今回の調査においてすべての遺構を検出した遺構面である。第4層以下の状況は、下位に向かって20~30 cmの厚みをもつ黄褐色系のシルト(第5層)、30 cm程度の厚みをもつ灰黄褐色系の細砂混粘土(第6層)が堆積し、その下に黄褐色系のシルト混細砂(第7層)を確認した。第5層は、東端部に比べ西端部が厚く堆積し、また第7層の上面は、大きく蛇行する状況を第2区の北壁直下に設定したサブトレンチ内で確認した。第6層は、第47次調査などで検出している黄色系の土層に挟まれた褐色系の土層と判断した。遺物は、第5・6層において微量の弥生時代前期に比定できる土器が出土した。

遺構は、第1区において、古墳時代初頭の溝1条及び後期の溝3条を検出し、また第2区では古墳時代と考えられる土坑1基、奈良時代初頭の溝状遺構1条の他、時期の限定できないピット3基を検出した。

〔第1区〕溝3は調査区ほぼ中央で検出したやや西側に向けて湾曲する幅  $1.9\,\mathrm{m}$ 、深さ  $85\,\mathrm{cm}$  前後 の溝である。溝断面は、緩やかな段を形成しながら落ち込み、その形状は「V」字形をなす。また 覆土は全体的に灰褐色系の色調で  $5\,\mathrm{\mu}$ 位に分けられ、上位の  $2\,\mathrm{\mu}$ 位はシルト質であるのに対し、中位の  $2\,\mathrm{\mu}$ 位は砂質が強く最下層が粘土質となる。上位にあたる  $2\,\mathrm{\mu}$ 位のそれぞれ下部には炭が含ま



調査地土層柱状模式図

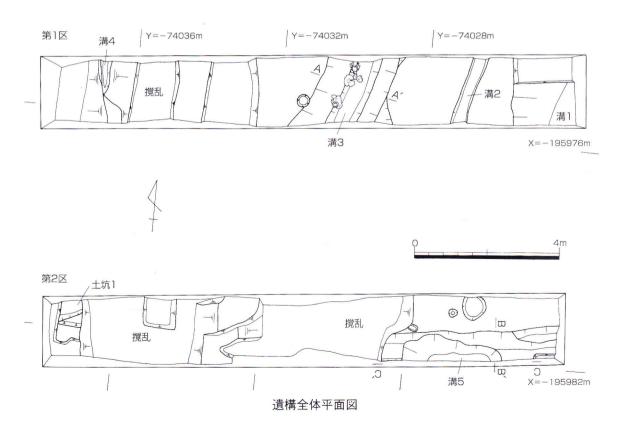
れている。また遺物は極めて多く含まれ、溝中央よりやや西側に集中する状態で壺・甕などの完形 品が出土した。これらの土器の対応する土層は、先述の中位2単位にあたる。

この他、調査区東端部で検出した幅  $1.8\,\mathrm{m以}$ 上、深さ  $15\,\mathrm{cm}$ 程度の緩やかに落ち込む南北方向の溝  $1\,\mathrm{や調査区東半部で検出した幅}\,35\sim40\,\mathrm{cm}$ 、深さ  $20\,\mathrm{cm}$ 程度を測る南北方向の溝  $2\,\mathrm{cm}$ 、調査区西端で検出した幅  $25\,\mathrm{cm}$ 、深さ  $5\,\mathrm{cm}$ 程度の南北方向の溝  $4\,\mathrm{tx}$ どがある。これらの時期として、溝  $1\,\mathrm{tt}\,6\,\mathrm{tt}$ 世紀代、溝  $2\,\mathrm{tt}\,4\,\mathrm{tt}$ も近似する時期と考えられる。

〔第2区〕溝5は調査区東端部で検出した幅90 cm以上、最深部の深さ86 cmを測る東西方向の溝状遺構である。この遺構は直線的にのびる北肩部を4.6 m分検出し、掘削を進めるなか中央部に東西2.7 mの範囲で深く落ち込む部分を検出した。調査時点では時期の異なる別の遺構とも考えたが、南壁面の土層の観察や出土遺物の時期から同一の遺構と判断した。遺構内部の堆積は、6 単位に分けられる。上位にあたる2 単位は、暗灰黄色系のシルト質土層で下位に向かって砂質が強くなり、中位にあたる3 単位は細砂及び粗砂質、最下層のみ粘土質となる。覆土内からは土師器、須恵器などの細片が出土し、時期的に奈良時代初頭の遺構と考えられる。

〔出土遺物〕遺物は弥生時代前期から中期にかけての土器をはじめ、土師器、須恵器、黒色土器、中世土師器、瓦器、輸入陶磁器、国産陶磁器、瓦、土製品、石器などがあり、遺物収納コンテナ8箱分が出土した。中でも、第1区の溝3出土遺物は、古墳時代初頭の一括性が高い遺物群である。

 $1 \sim 14$  は第1区溝 3 から出土した土師器である。 $1 \cdot 2$  はともに複合口縁壺である。1 は大きく垂下させた外端面下部に浮文を貼付けたものである。頸部に突帯を巡らせ上部に細かい刻み目を入れている。また口縁内端面にはタール状のものが全面に付着している。2 は長胴の器形をもち口縁部が大きく内側に屈曲するもので、内外面とも剥離が著しく、外面には成形時の平行タタキ痕が現れ、また内面は下半部のみにハケ調整が観察できる。体部上位には、外面から穿たれた穿孔が 1 ケ



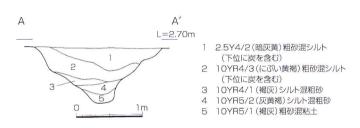
**-** 6 **-**

所確認できる。3~7は甕である。3・4は外面にタタキ痕を明瞭に残すものである。3は直にのびる口縁部外面に刻み目が施されている。4は強いヨコナデによって口縁部が外反し、体部内面には板状工具によるナデ調整が確認できる。5は口縁部がやや外反し全体的に歪みが著しいもので、体部外面はナデ調整が行われているものの成形時のタタキがわずかに確認できる。6は体部が球体を呈するもので、口縁端部は上方に突出し、外端面を作り出している。外面調整は、上位にタタキ痕を残し、頸部及び底部周辺を中心としてハケ調整が施されている。また内面は、体部中位及び底面にヘラケズリ痕を残し、上位と下部の一部にハケ調整が行われている。7は口縁端部をやや上方につまみ上げているものである。外面はタタキの後ハケ調整が行われ、また内面はヨコ方向のハケ調整が行われている。8~10は鉢である。8・9は外面にタタキ痕を残すものである。10は小型の鉢で、内外面とも底部周辺にヘラケズリを行った後、上位をナデによって仕上げている。11・12は底部で11は壺、12は鉢の底部と考えられる。13は小型器台の杯部で、口縁端部を上方につまみ上げている。内面は、剥離が著しく不明瞭であるが、外面には丁寧なヘラミガキが施されている。14は高杯の脚部である。大きく開く脚中位には直径1.3 cm程度の円孔が3ヶ所穿たれていたと考えられる。これらの土器の胎土には石英、結晶片岩、赤色軟質粒などが含まれ、在地系土器の特徴をもつ。

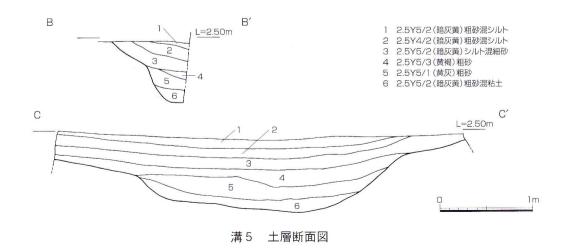
15 は、弥生土器壺体部の破片を円形に打ち欠いて転用した有孔円板の未製品である。上面の中央部付近には円孔を穿ちかけた痕跡が確認できる。出土位置は、第1区の溝3である。

 $16\sim23$  は石器及び石製品である。 $16\cdot17$  はサヌカイト製の石鏃である。16 は凹基式のもので、先端部が欠失している。表裏面に大剥離面を残し、細部調整は不明瞭である。17 は硬質の素材を用いた有茎式のもので、細部調整は表裏面とも基部から先端に向かって行われている。18 は硬質

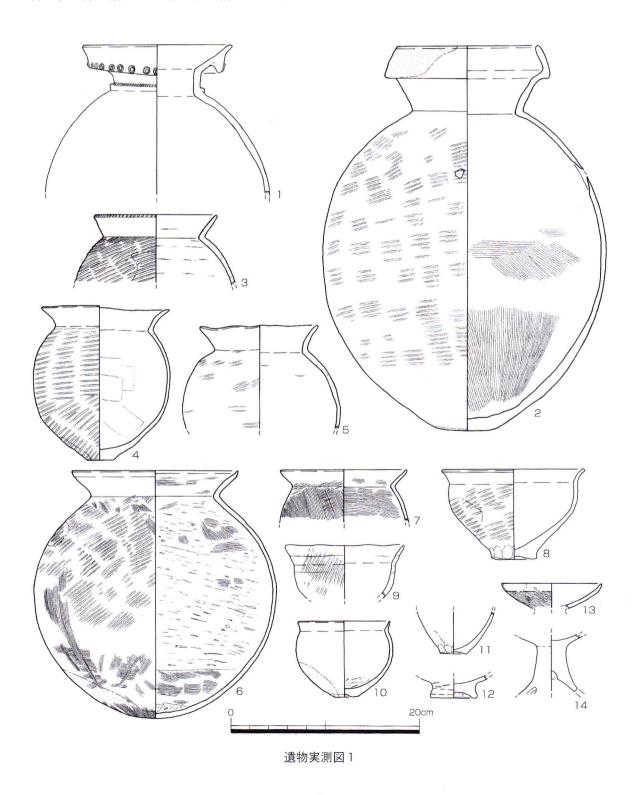
の結晶片岩を加工した柱状片刃石斧であり、刃部は節理面と直交する方向性で破損し欠失している。残存する基部上面の左右端部には抉りが施され、この部分以外の全面に丁寧な研磨痕が観察できる。19 はやや軟質の結晶片岩を用いた石庖丁であり、両端部ともに欠失している。表面には比較的研磨痕が



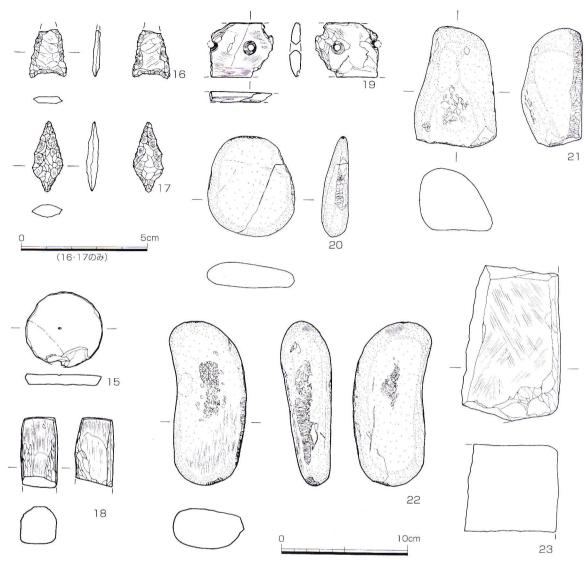
溝 3 土層断面図



観察できるが、裏面は剥離が著しく不明瞭である。 $20\sim22$  は砂岩川原石を用いた叩石である。敲打痕は側縁部に集中して筋状の痕跡が明瞭に観察できる他、上端部や上下端部にも観察できるものがある。また 22 には筋状の研磨痕が表面と上部端面に観察でき、叩石と磨石の複合石器である。23 は砂岩川原石を用いた砥石である。上面及び側縁部一面のみが残存しているもので、上面のみに細かな研磨痕と光沢が観察できる。これらの重量は 20 が 162 g、21 が 420 g、23 が 430 g である。これらの出土位置は、 $16\cdot17$  が第 1 区の第 4 層、 $18\cdot20\cdot22\cdot23$  が第 1 区の溝 3、19 が第 2 区の第 4 層、21 が第 2 区の溝 3 である。



-8-



遺物実測図2

#### まとめ

今回の調査成果は、これまで比較的調査例の少なかった遺跡北半部においてその様相の一端を明らかにしたことであり、弥生時代よりも古墳時代以降の遺構群が主体であることが挙げられる。周辺におけるこれまでの調査では、第23・36・43・51次調査において溝を中心とした遺構群が検出され、特に第51次調査では前期の竪穴住居2棟を検出し、当遺跡範囲の中でも古墳時代前期段階の集落域中心部の一つとして位置づけられる。今回の調査においても第1区で検出した古墳時代初頭の溝3をはじめ多くの遺構が古墳時代の範疇におさまるものであり、出土した土器の大半がこの時期のものである。また溝3には溝埋設時に意図的に投棄されたとみられる多量の土器群があり、その状況からみても集落の中心部である可能性が高いものと考えられ、東側約60mに位置する第51次調査の様相を踏まえても古墳時代前期にその盛期が考えられよう。

(井馬好英)

## 3. 太田・黒田遺跡 第57 次調査

調 査 地 和歌山市黒田字桑 / 木 255-1 ・ 5 ・ 6 番地内 調査面積 40.8 m<sup>2</sup>

#### 位置と環境

太田・黒田遺跡は、紀ノ川下流南岸の和歌山平野のほぼ中央部に位置し、平野部でも微高地にあたる地点に所在する。弥生時代から江戸時代にかけての大規模な複合遺跡である。

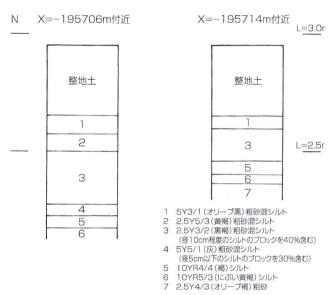
今回の調査は、遺跡範囲北端部の範囲外隣接地である和歌山市黒田字桑ノ木においてマンション 建設工事が行われることになり、遺跡範囲の近接地であることから、工事に先立ち試掘調査を実施

することになった。調査は、和歌山市教育 委員会が国庫補助金を得て、財団法人和歌 山市文化体育振興事業団が同教育委員会の 指導のもと委託を受けて実施した。

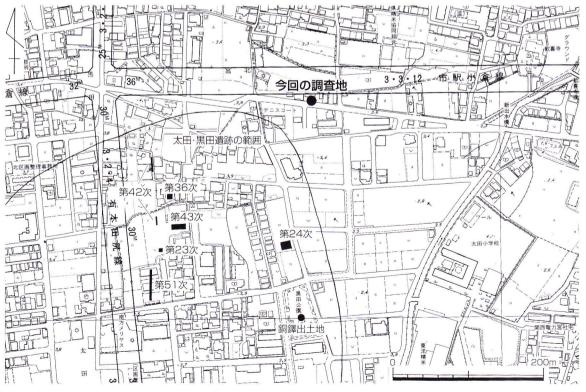
#### 調査内容

調査地は遺跡範囲北端部の範囲外隣接地に位置し、調査はマンション建設工事予定 範囲に東西幅 3.4 m、南北長 12.0 mの面積 40.8 mの調査区を設定、実施した。

調査地の地表面標高は約3.0 mを測る。 基本層序について、地表下深さ約60 cmまでは近年のものとみられる整地土が堆積しており、その下の旧表土と考えられる第1



調査地土層柱状模式図



調査位置図

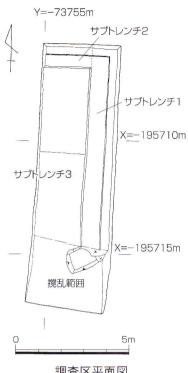
層は厚さ約30cmの厚みの水田耕土である。第2層は厚さ約10cmの 厚みをもつ黄褐色のシルトであり、床土に相当する層である。第3 層は厚さ 25 cmの厚みをもつ黒褐色の粗砂混シルトで江戸時代まで の遺物を僅かに包含する層である。この第3層上面まで重機により 全面掘削を行い、以下の土層堆積はサブトレンチ調査において確認 したものである。第4層は厚さ約5cmの厚みの灰色の粗砂混シルト で、第3層と同様江戸時代までの遺物を僅かに包含する層である。 第3・4層は X=-195714 m付近から北東方向に下降した傾斜を もって堆積している。また、これらの層には約10cm大のブロック 状のシルトが $30 \sim 40\%$ 混入しており、第2層と第3層、第3層と 第4層、第4層と第5層の各境界面が平坦ではなく波状に乱れてい ることなどから、第2~4層は第5層上面において低地部分を埋め 立てた盛土と考えられる。第5層は厚さ10cmの褐色のシルトで、 南西から北東に下降した傾斜をもって堆積しており、調査区北東隅 が最も低く第5層下面の標高は1.8 mを測り、土師器の細片が1点

出土した。第6層は厚さ5cm以上のにぶい黄褐のシルト、 第7層は厚さ10cm以上のオリーブ褐の粗砂で、これらの 層からは遺物の出土はみられなかった。第5層は中世以降 の堆積であるとみられ、第5層が堆積した時には調査区か ら北東方向に向かって微低地状地形が周囲に広がっていた ものと考えられ、その下の第6層についても同様の状況が あり、第5・6層は微低地状地形の低い部分に堆積した土層 であると考えられる。

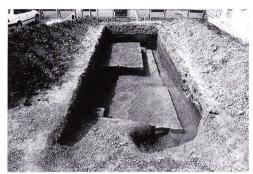
出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、瀬戸・美 濃系陶器、肥前系陶磁器、焼締陶器、平・丸瓦、石英製火 打石、碁石などである。遺物の大半は第3・4層から出土 したもので、全て小破片である。第5層からは中世の土師 器とみられる細片が1点出土した。

#### まとめ

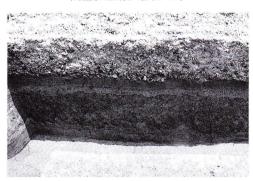
今回の調査では、第5層上面で南西から北東に下降した 傾斜をもつ中世以降とみられる微低地状地形を検出し、調 査区から北東方向に向かって微低地状地形が周囲に広がっ



調査区平面図



調査区全景(南から)



東壁土層堆積状況(西から)

ていたことを明らかにした。第2~4層は、江戸時代に微低地状地形を埋め立てた盛土であると考 えられ、第3・4層から出土した遺物の一群について、最も新しいとみられる肥前系陶磁器(染付 碗)と焼締陶器(堺焼擂鉢)から、埋め立ての時期を 18 世紀後半以降と考えることができる。ま た、これらの層の直上の第1層は水田耕土であることから、周辺地における江戸時代の水田開発に かかる整地により、これらの盛土が行われた可能性を考えることができる。 (北野隆亮)

### 4. 太田・黒田遺跡 第58 次調査

調 査 地 和歌山市太田 537 - 3 番地 調査面積 約 59 ㎡

#### 位置と環境

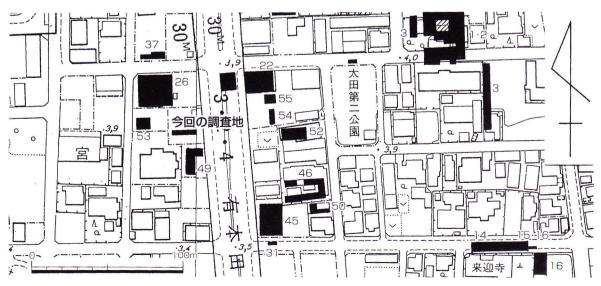
太田・黒田遺跡は、東西 500 m、南北 850 mの範囲に広がる県内最大規模の集落遺跡であり、これまでに過去 57 次を数える発掘調査が行われている。調査の結果、弥生時代前期末の内・外環濠 2 条や竪穴住居及び土坑、中期の竪穴住居や井戸、土器棺墓など多数の遺構が検出されており、遺物では直柄広鍬や一本平鋤などの木製農耕具、さらに銅鐸や銅鏃などの金属器のほか絵画土器(鹿)を含む多量の弥生土器が出土している。そのほか、古墳時代から江戸時代の遺構及び遺物も確認されており、室町時代には豊臣秀吉によって水攻めされた太田城跡の推定地が含まれるものである。

今回の調査地は、第 26・45 次調査において検出された弥生時代前期末の 2 条の環濠のうち、外環濠の推定ライン上に位置する。また第 49 次調査では、弥生時代前期の落ち込み状遺構や前期から中期初頭の焼土坑、古墳時代後期の溝や土坑などのほか江戸時代後期の土坑などが検出されている。

#### 調査内容

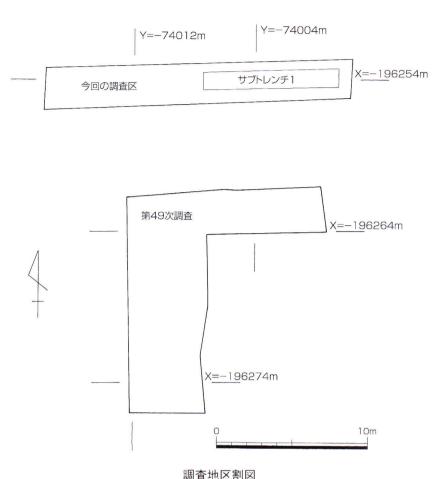
調査は、東西 21 m、南北 2.8 mの調査区を設定し行った。調査の方法は、造成土及び近現代の耕作土(第1層)については重機を用いて掘削を行い、第2層以下の遺物包含層と遺構の調査は人力によって掘削を行った。溝や土坑などの遺構掘削は、土層堆積観察用のセクションベルトを直交するライン上に設け、2層以上の堆積が認められるものについては写真撮影及び土層断面実測による記録保存を行った。また、下層の遺構調査及び土層堆積状況を確認する目的で東西 9 m、南北 1.2 mのサブトレンチ 1 を設定し掘削を行った。土層の色調及び土質の観察には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳』を使用した。遺構平面図などの図面による記録は、国土座標(日本測地系)の整数値に合致した測量杭を調査範囲内に設置し 1/20 の縮尺を用い手実測で行った。また遺跡の水準は、国家水準点(T.P.値)を基準とした。

調査地の基本層序は、まず現表土である造成土が調査区の全面にみられる。表土下の第1層は近



調查位置図

現代の耕作土とみられる ものである。また第2層 は、江戸時代後期の遺物 包含層と考えられるもの で、その上面は江戸時代 後期末の耕作に伴う南北 方向の小溝群を多数検出 した第1遺構面である。 第3層は、弥生時代中期 の遺物包含層とみられる ものである。この上面は 古墳時代中期及び中世の ピット、また江戸時代後 期の溝や不定形な落ち込 みを検出した第2遺構面 である。これら第1・2 層上面の標高は、第2層 が 2.8 ~ 2.9 m、第 3 層 が  $2.7 \sim 2.8 \,\mathrm{m}$  を 測 り、

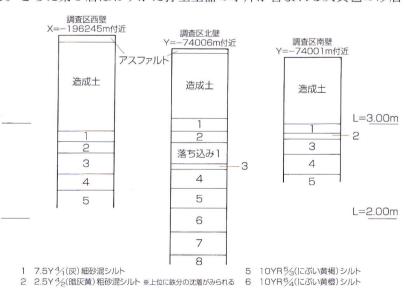


調査区の中央やや西側を最高所として東西に向かって低くなる。

次に第4層以下の各堆積層は、調査区の東半部において設定したサブトレンチ1や遺構壁面にお いて確認したものである。第4・5層はともに黄褐色系のシルトであり、第4層からは弥生時代中 期の遺物が出土している。また第6層はにぶい黄橙色のシルトであり、第7層は弥生時代前期の遺 物包含層とみられるものである。さらに第8層はわずかに弥生土器の小片が含まれる灰黄色の砂層 である。

今回の調査で検出した遺 構として第2遺構面では、 古墳時代のピット 16 基及 び中世のピット1基(ピッ ト 16) や、江戸時代の溝 1 条及び不定形な落ち込み2 基のほか時期不詳の杭穴を 多数検出した。以下、主な 遺構について説明する。

まず溝17は調査区の西 端部で検出したもので検出 長3.5 m、幅3.3 m、深さ



3 2.5Y 76(明黄褐)シルト混粗砂 4 2.5Y % (明黄褐)シルト

10YR5/2(灰黄褐)シルト

8 2.5Y%(灰黄)細砂

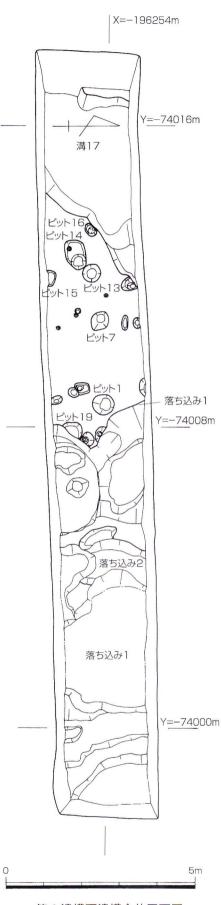
調査地土層柱状模式図

44~70 cmを測り、その方向性は N-75°-Eである。覆土は、調査区北・南壁面の土層堆積状況の観察では大きく4単位に分層することができ、最下層には粘性のある黄灰色の細砂混シルトが堆積している。この遺構の時期については、覆土内から肥前系磁器染付碗や桟瓦が出土することから江戸時代後期とみられる。

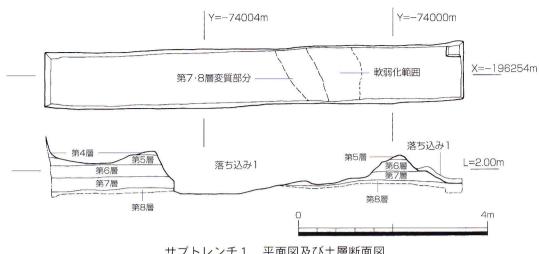
落ち込み1は東西幅が10.4 m以上、深さは検出面から0.5~ 1.3 m、また現地表面から最深部まで 1.9 m以上を測るものであ る。この遺構の特徴としては、遺構底面が平坦ではなく不整円 形及び楕円形状の凹凸が全面にみられることである。覆土は、 調査区の東壁面や南壁面では8単位の堆積が認められる。これ らの覆土は、灰褐色から黒褐色の細砂混シルトに第3・4層 (遺物包含層) と類似する明黄褐色シルトがブロック状に含ま れ、その堆積状況は安定したレンズ状の堆積ではなく、一度に 大量の土砂を埋め戻したかのような状態を示している。またこ れらの覆土内からは、弥生時代前期から江戸時代後期までの遺 物が多量に出土した。以上のことから、落ち込み1の性格とし ては、良質シルトの採取を目的とした粘土採掘坑の可能性があ り、この落ち込み内に堆積した覆土は、調査地付近の弥生時代 前期から江戸時代後期までの遺構の残土であると考えられる。 この遺構の時期としては、出土遺物から江戸時代後期のものと 考えられる。落ち込み2は、落ち込み1の底面において検出し た不整円形の土坑である。落ち込み1にやや先行する粘土採掘 坑とみられる。

そのほか第1遺構面では、江戸時代の小溝17条を検出した。 これらの溝は、調査区の東半部において検出したもので、その 性格としては耕作に伴うものと考えられる。時期については土 層堆積状況や出土遺物から江戸時代後期末と考えられる。

サブトレンチ1は、調査区東半部において弥生時代前期環濠の確認を目的に設定したものである。掘削した結果、落ち込み1の底面は調査区東側の大部分において第8層上面付近(標高1.7 m前後)にまでおよぶことを確認した。よって、弥生時代前期環濠についてはこの落ち込み1によって削平を受けているものと考えられる。ただ、弥生時代前期末の外環濠の推定ライン上において、落ち込み1の底面である第7・8層が青灰色に変色し、またその周囲の堆積が軟弱化する部分を確認した。この変質部分は、調査区を北西から南東方向に横切るものでその



第2遺構面遺構全体平面図



サブトレンチ1 平面図及び土層断面図

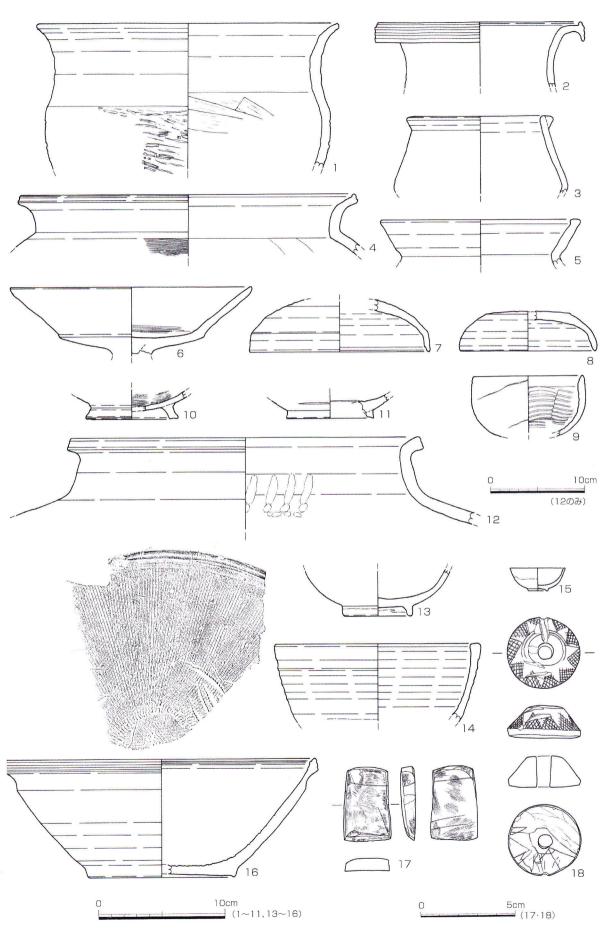
方向性は N-25°-W であり、その方向性や検出面の標高からみて弥生時代前期末の外環濠の痕跡と して矛盾しないものである。

遺物は、各時代の遺構覆土や第2~8層の遺物包含層から収納コンテナ13箱分が出土した。こ れらの遺物には、弥生時代前期から中期にかけての弥生土器をはじめ、土師器、須恵器、製塩土器、 黑色土器、緑釉陶器、中世須惠器、中世土師器、瓦器、瓦質土器、輸入陶磁器、国産陶磁器、瓦、 土製品、石器、石製品、金属器などがある。以下、主な遺物について説明する。

 $1 \sim 4$  は弥生土器である。1 は紀伊形甕であり、口径は $23.6~\mathrm{cm}$ を測る。外面の調整として口縁 部と体部との境界部分には、横方向のヘラケズリが明瞭に認められる。時期については、紀伊第Ⅱ 様式のものと考えられる。2は広口壺であり、口径は16.0 cmを測る。口縁端部は上下に肥厚する もので、下方への垂下が著しく、凹線文によって加飾されている。 3 は無頸壺であり、口径は 10.0 cmを測る。口縁端部には、断面三角形の粘土を貼り付け肥厚させている。色調は黄褐色から灰黄褐 色を呈し、胎土に雲母を含み結晶片岩がみられないことから搬入品の可能性がある。 4 は遠賀川系 の甕であり、口径は 26.2 cmを測る。口縁端部は上方につまみ肥厚させている。体部内面の調整に は板ナデが施されている。これら2~4の時期については紀伊第Ⅳ様式のものと考えられる。

 $5\sim 9$  は古墳時代の土器である。 $5\cdot 6$  は土師器である。5 は甕であり、口径は15.8 cmを測る。 口縁端部は内側に肥厚させている。色調は、外面に煤が付着しており黒褐色である。6は高杯であ り、口径は19.1 cmを測る。内面の調整はハケの後ヨコナデを施すものである。これら5・6 は布 留式併行期のものと考えられる。7・8は須恵器の杯蓋である。7は口径14.2 cmを測るもので、 口縁端部内面には沈線が一条巡らされている。8は口径10.6 cmを測るものである。これらは7が TK-43型式、8がTK-217型式に比定されるものと考えられる。9は丸底II式の製塩土器で あり、口径は 8.5 cmを測る。体部内面の調整には貝殻条痕が施されており、また体部外面には粘土 紐痕が観察できる。さらに体部内面には塩の結晶が認められる。古墳時代後期のものと考えられる。

10・11 は平安時代の土器である。10 は黒色土器 A 類の椀であり、高台径は 7.3 cmを測る。高台 は、ハの字型に斜め外方へ張り出すもので貼り付け高台である。底部内面の調整には、不定方向の ハケ後ミガキが施されている。11 は緑釉陶器の椀であり、高台径は 6.8 cmを測る。高台は貼り付け の有段輪高台であり、畳付部には施釉されていない。また底部内面見込部には1条の沈線が施され



遺物実測図

ている。焼成は還元焔焼成である。平安時代後期のものと考えられる。

12 は鎌倉時代の土器である。12 は焼締陶器の常滑焼甕であり、口径は 36.8 cmを測る。口縁部は 頸部から短く折れて外反し、側端面が内傾するものである。頸部内面の調整には、縦方向に長い指 オサエと指頭圧痕が認められる。色調は褐色を呈する。鎌倉時代前期のものと考えられる。

13~16 は江戸時代の土器である。13・14 は瀬戸・美濃系陶器である。13 は灰釉碗であり、高台径は5.2 cmを測る。釉薬は淡緑灰色の灰釉であり、内外面全体に施した後、高台畳付付近の釉薬を削り取っている。14 は灰釉鉢であり、口径は16.3 cmを測る。口縁端部はやや肥厚させ肉厚に仕上げている。釉薬は外面体部上半と内面に施されており、外面体部下半は露胎である。これらの色調は、ともに施釉部が緑灰色から淡緑灰色であり、露胎部が黄灰色である。15 は肥前系白磁の紅猪口であり、口径4.3 cm、器高1.8 cmを測る。釉薬は浸け掛けによるもので、外面体部上半及び内面全体に透明釉が施されており、体部下半及び高台部分は露胎である。時期については、江戸時代後期のものであろう。16 は堺焼擂鉢であり、口径24.3 cmを測る。外面の調整はヘラケズリ後ナデ消しを施すもので、底部には削り出しによる低い高台が作り出されている。また、底面には高台削り出し以前のものとみられるゴザ状圧痕が認められる。

17・18 は石製品である。17 は、層灰岩製の扁平片刃石斧で全長 3.9 cm、最大幅 2.5 cm、最大厚 0.8 cmを測り、重量は 13.4 g である。表裏面及び側面は研磨によって丁寧に成形されており、研磨 痕が明瞭に観察できる。色調は暗灰黄色である。類例は、和歌山県御坊市堅田遺跡において弥生時代前期のものが 1 点確認されており、北部九州地方からの搬入品とされている。18 は、滑石製紡錘車で直径 3.9 cm、最大厚 1.6 cm、孔径 0.8 cmを測り、重量は 31.3 g である。断面形は台形を呈するもので、表面には細線によって稚拙な鋸歯文と、その上部に全周はしないものの 2 条の沈線が描かれている。また裏面には、細線によって鋸歯文状の文様が描かれているほか、成形痕とみられる細く浅い凹みを数条観察することができる。色調は暗灰色である。

これらの遺物は、 $1\sim6$ ・8・10・12  $\sim$  16 が落ち込み 1、7・9・11・17・18 が溝 17 から出土した。

#### まとめ

弥生時代前期末の環濠は、第 26 次調査において内環濠が、第 45 次調査において内・外環濠が確認されている。今回の調査地は、その位置関係から外環濠の推定ライン上に位置するものである。調査ではサブトレンチ 1 において、外環濠の痕跡と考えられる土質の変質部分を確認することができた。環濠についての過去の調査成果では、内環濠の底面の標高は  $0.8 \sim 1.1$  mを測り北西から南東に向かって傾斜する。また外環濠の底面の標高についても、調査地の南東に位置する第 45 次調査では  $1.3 \sim 1.4$  mを測り北西から南東に傾斜するものである。よって、今回の調査で確認した土質の変質部分については、外環濠の底面の痕跡として矛盾しないものと思われる。

江戸時代後期の粘土採掘坑とみられる落ち込み1については、南隣接地で行われた第49次調査においても覆土や遺構底面の形状など同じ特徴をもつ遺構が確認されているため、さらに南北に広がる可能性がある。また今回出土した遺物は、その大部分がこの落ち込み1を埋め戻した埋土(覆土)から出土した。よってこれらの遺物群は、調査地周辺から持ち込まれた可能性を示すものであり、本調査地に帰属する遺物群として単純には理解できないものと考えられる。 (藤藪勝則)

## 5. 鳴神 V 遺跡 第 9 次発掘調査

調 查 地 和歌山市秋月字中瀬 176-9 番地 調查面積 68 ㎡

#### 位置と環境

鳴神 V 遺跡 (遺跡番号 318) は和歌山市の東部に位置し、紀ノ川下流南岸の和歌山平野の沖積平野に立地する。この遺跡は東西 300 m、南北 400 mの範囲に広がる弥生時代から平安時代の遺物散布地として知られる。調査対象地は遺跡範囲内の北端に位置する。

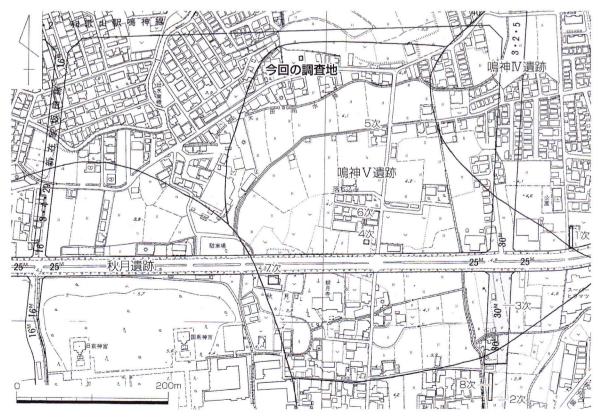
#### 調査内容

調査は、住宅建築予定範囲内に東西 8.0 m、南北 8.5 mの調査区を設けて行った。さらに、下層 遺構の有無及び土層堆積状況の確認を目的として部分的に下層調査(サブトレンチ)を実施した。

調査地の基本層序は、現表土が厚さ約1 m、旧耕土(第1層)は  $10 \sim 20$  cm、第2層は約30 cm、第3層は約50 cm、第4層は30  $\sim 40$  cm、第5層は50 cm以上の厚さで全体に堆積する。第2層から下層の状況は調査区の北・西・東壁面に沿って設定したサブトレンチにおいて確認した。第2層は遺物包含層であるが、第3層以下については、遺物を確認することはできなかった。また、第1層 $\sim$ 第3層は南側に下降した緩やかな傾斜がみられ、第4層 $\sim$ 第5層はX=-196154m付近で急激に南側 $\sim$ 下降した傾斜がみられることから、この地点から南側は谷状地形であったと推測される。

遺構については、第2層上面において古墳時代と室町時代から江戸時代後期まで、江戸時代末期 以降の遺構面を確認した。

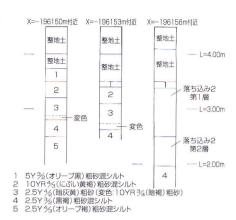
調査区北側において検出したピット 15 基は直径約 12 cmと直径 25  $\sim$  50 cmの 2 群に分類することができ、前者は杭跡と考えられる。出土遺物から古墳時代(ピット 4  $\cdot$  6  $\cdot$  7  $\cdot$  9  $\cdot$  12)と室



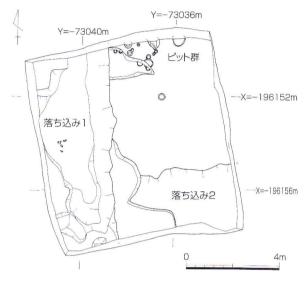
調査位置図

町時代(ピット5・10・13・14)のものを確認することができた。また西側において東西幅 2.2 m以上、南北長 8.0 m以上、深さ 67 cm以上の落ち込み 1 を検出した。埋土の堆積状況から河道と考えられる。覆土は 7 層に分層することができ、古墳時代から江戸時代後期までの遺物を含み、遺構の底面においては、古墳時代の土師器や須恵器、石器などの遺物が多く出土した。この遺構は、南北方向の河道の東側肩部を検出したもので、西側は調査区外に広がり全容は不明である。形成時期は不明であるが、出土遺物から江戸時代後期頃に埋没したものと考えられる。

南側のサブトレンチ2を調査した結果、基本土層第2層の堆積と認識していたが遺構の可能性があったため、再度遺構検出を行い、東西長7.5 m以上、南北幅2.5 m以上、深さ1.5 m以上の落ち込み2を検出した。底面の標高は約2.0 mを測り、埋土の堆積状況から河道と考えられる。この遺構は、東西方向の河道の北側肩部を検出したもので、検出した範囲の覆土は3層に分層することができ、第2層には、木片などの有機質の遺物が含まれていた。形成された時期は不明であるが、出土遺物から古墳時代以前のものと考えられる。



調査地土層柱状模式図



遺構全体平面図

江戸時代末期以降の遺構は、耕作に伴うと考えられる小溝 13 条やピット 3 基を検出した。小溝 は幅約 20 cm、深さ  $1\sim5$  cm、検出長は  $0.4\sim5.2$  mである。ピットは径  $10\sim15$  cm、深さ  $2\sim6$  cmを測り、杭跡とみられる。これらの遺構は、調査区の中央部より西側で検出したものである。

遺物は、江戸時代後期に埋没したと考えられる河道(落ち込み1)の覆土から出土した土器を中心に、韓式系を含む土師器、須恵器、黒色土器、中世須恵器、中世土師器、瓦器、瓦質土器、中世の国産陶器、輸入陶磁器、近世の陶磁器、瓦、石器(叩石、凹石、磨石)、石製品(砥石、チャート製・石英製火打石)、土製品(土錘、紡錘車)、自然遺物(炭など)がある。

#### まとめ

これまで鳴神\\I 遺跡など周囲の調査成果から本遺跡北側は紀ノ川の氾濫源と考えられており、北側への遺構はさほど広がりをもつものとは考えられていなかった。しかし、調査の結果、調査区北東部においてピットや杭跡を検出したことや土層堆積状況などから、調査対象地周辺は農耕地帯であったと考えられる。また、古墳時代のものと考えられる河道や江戸時代後期に埋没したとみられる河道の実体解明が今後の課題であるといえる。

以上、今回の調査において鳴神 V 遺跡の北西端の一様相を明らかにすることができた。(奥村 薫) 【参考文献】 『和歌山市内遺跡発掘調査概報―平成 17 年度―』 和歌山市教育委員会 2007 年

## 6. 西庄遺跡 第4次調查

調 査 地 和歌山市本脇 43-1 番地 他 調査面積 82.6 m<sup>2</sup>

#### 位置と環境

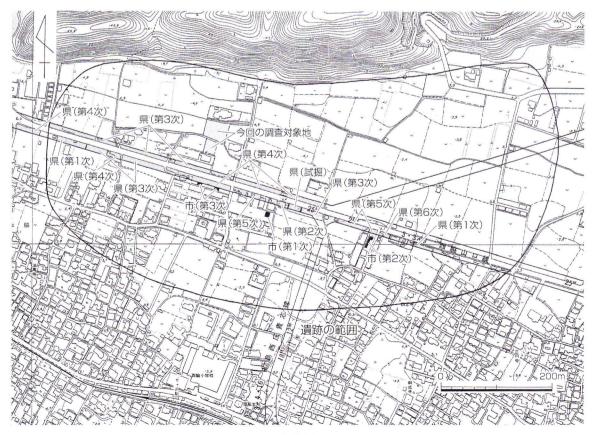
和歌山市西庄及び本脇周辺に所在する西庄遺跡は、標高 4.5 m前後の砂堆に位置する海浜集落である。この遺跡は、東西 900 m、南北 400 mの範囲をもち、古墳時代を中心とした大規模な製塩遺跡として知られている。当遺跡の調査として県道西脇・山口線の拡幅工事に伴う調査が財団法人和歌山県文化財センターによって行われ、古墳時代の竪穴住居や掘立柱建物、石敷製塩炉、古墳などの遺構が多数検出されている。

#### 調査内容

今回の調査は、造成工事計画範囲約 2000 ㎡を対象に  $2 \times 2$  m四方のグリッド調査区を 18 ヶ所設定して実施したものである。調査対象地は、その中央を東西に貫く灌漑用水路によって 2 区画に分かれていたため、北側の区画を第 1 区、南側の区画を第 2 区と定めて順次番号を付した。

調査地の堆積は第1区と第2区では大きく異なり、第1区では中世から沖積作用によって堆積したと考えられるシルト質層であるのに対し、第2区では砂堆部にあたる細砂を中心とした堆積である。このことから、第2区は砂堆の北側末端部に位置し、第1区は砂堆の背後に形成された後背低地、ラグーンとして位置づけられる。

遺構は第1・2区ともに奈良時代までの遺物を含む遺物包含層(第3層)下の第4層上面におい



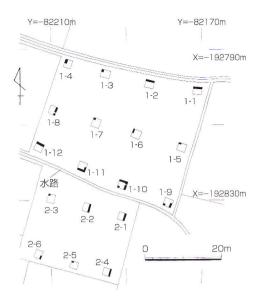
調査位置図

て検出できた。第1区ではその全形は不明であ るものの6世紀代の竪穴住居と考えられる遺構 を5基検出した他、溝、ピットなどほとんどの 調査区において確認した。竪穴住居と考えられ る遺構は、壁面が直線的に延び底面がほぼ水平 になる特徴を持つものである。また第2区では 2-2区を除く5区画において掘立柱建物に伴 うとみられるピット群を検出した。ピットは直 径 40 cm程度のものが多く、掘削を行ったものの 中では深さ30cm程度のものが多い。

遺物は、遺構覆土や第3層などの遺物包含層 から遺物収納コンテナ21箱分が出土した。遺物 の内容は、古墳時代の土師器・須恵器の他、黒 色土器・瓦器・輸入陶磁器などがある。土器以 外のものでは、土錘や紡錘車などの土製品、叩 石や石錘などの石器、滑石製の臼玉・有孔円板 などの石製品がある。

#### まとめ

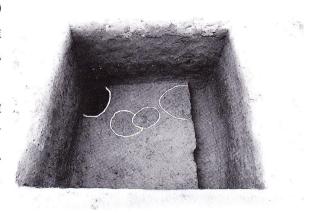
今回の調査成果は、これまで調査例のなかっ た遺跡北半部においてその様相の一端を明らか にしたことである。今回の調査地は遺跡の中心 部とされる南側に比べ遺構面の標高が50~70 cm程度低く、立地的にも砂堆の末端部及び砂堆 の背後に形成された後背低地であることが分か る。遺跡中心部では、これまで5世紀末から6 世紀末にかけての竪穴住居など多数の遺構が検 出され、明らかに集落の中心部として位置づけ られる。今回の検出遺構からみて集落の北部へ の広がりは、少なくとも当該地まで及んでいる ことは確実であり、その時期は6世紀代に至っ てからと考えられる。また第1区北端の1-1 ~1-4区にかけては遺構が検出されず、遺物



調査地区割図(黒塗り部分はサブトレンチ)



1-6区全景(西から)



2-4区全景(南から)

量も減少傾向にあるので集落の北端に近傍する調査区として位置づけられよう。 (井馬好英)

【参考文献】『和歌山市内遺跡発掘調査概報』 —平成17年度— 和歌山市教育委員会

## 7. 木ノ本 I 遺跡 第2次試掘調査

調 査 地 和歌山市西庄字宮下 27・28・29 番地内 調査面積 134 ㎡

#### 位置と環境

木ノ本 I 遺跡 (遺跡番号 40) は和歌山市の北西部、和泉山脈南麓の扇状地に位置し、東西約 450 m、南北約 350 mの範囲をもち、弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡として周知されている。

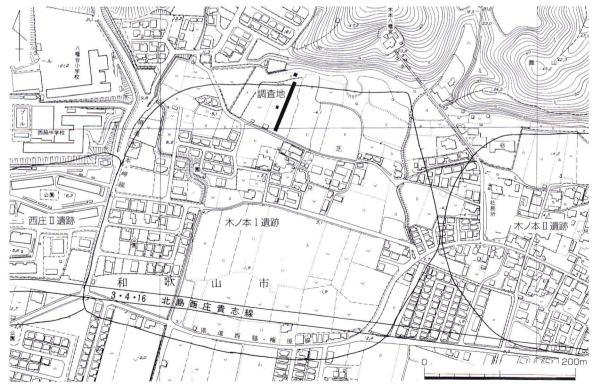
調査対象地は遺跡範囲内の北端部及び近接地に位置し、2004年に財団法人和歌山市文化体育振興事業団によって実施された第1次確認調査地の東側隣接地にあたる。この調査では中世以降の農耕に伴うものと考えられる南北方向の小溝を9条検出した。

#### 調査内容

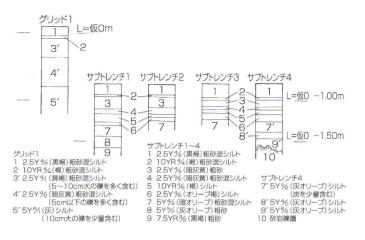
調査地は、遺跡北部に位置する住宅地に囲まれた水田地帯である。調査区は、汚水管埋設予定部分に幅2m、総延長63mの調査区(トレンチ)とその西側と北側に各1カ所、1辺2mの調査区(グリッド1・2)を設定した。さらに下層遺構の有無及び土層堆積状況の確認を目的として部分的に下層調査(サブトレンチ)を実施した。

遺構検出の結果、グリッド2とトレンチにおいて第5層上面で耕作に伴うと考えられる小溝や杭跡、土坑などを検出した。グリッド1では遺構を検出することはできなかった。また、サブトレンチの範囲内においても遺構を検出することはできなかった。

出土遺物は、土師器、須恵器、黒色土器、中世須恵器、中世土師器、瓦器、瓦質土器、備前焼、中国製磁器(青磁・白磁)、肥前系陶磁器、瀬戸系染付、堺焼擂鉢、砂岩製叩石、チャート製火打石、サヌカイト剥片などで、第1~6層・7′層の堆積層と第5層上面において検出した小溝群や



調査位置図



調査地土層柱状模式図

土坑からのものである。遺物量としては鎌倉時代を中心とした中世のものが比較的多く、次いで古墳時代のものがみられる。なお、江戸時代の遺物は第3層から上層にみられ、第4層は室町時代まで、第5・6層は鎌倉時代までの遺物を含む層である。

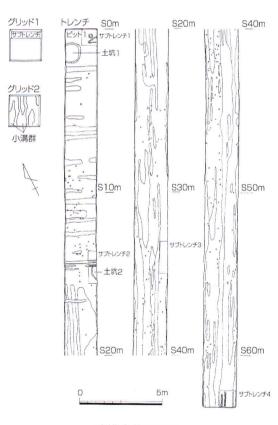
#### まとめ

調査の結果、第5層上面において中世のものと考えられる小溝群、杭跡、土坑などの遺構を検出した。この小溝群は農耕に関係するものとみられ、中世には耕地としての土地利用が行われていたものと考えられる。またS15m付近で小溝の掘削方向が、北側は東西、南側は南北方向と二分されるが、調査区の東側隣接地の畦にその地割りの名残を見ることができる。また、北端部において検出した土坑1からは、瓦器椀や中国製青磁碗などの遺物が出土しており、周辺地に集落が存在する可能性が考えられる。

サブトレンチ調査の結果、第6~10層上面において 遺構は確認できなかった。しかし、第6層には古墳時 代の遺物が含まれていることから、周辺に古墳時代の 遺構等が存在する可能性が考えられる。またサブトレ ンチ4において確認した第7<sup>2</sup>層について、土師器片や



調査地周辺図



遺構全体平面図

炭が出土していることから古墳時代の遺構の一部である可能性も考えられる。

遺跡範囲の北端の調査で、遺跡がさらに北側にも展開していることを明らかにすることができた。また、下層に古墳時代の遺構面が存在する可能性があり、今後も近隣の調査においては注意が必要である。 (奥村 薫)

【参考文献】『和歌山市内遺跡発掘調査概報—平成17年度—』

和歌山市教育委員会 2007年

## 8. 平の下遺跡第2次確認調査

調 査 地 和歌山市西庄 479 - 2、480 - 1・5、481 - 3 番地 調査面積 223 ㎡

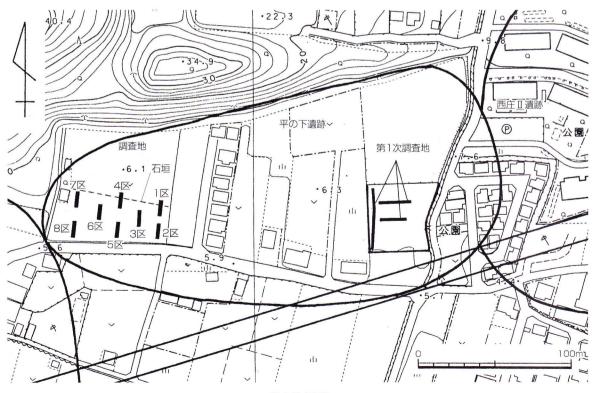
#### 位置と環境

平の下遺跡は、標高 4.5 m前後の和泉山脈南裾部の平地に立地する遺跡である。この遺跡は東西約 300 m、南北約 150 mの範囲に広がる遺物散布地として知られている。当遺跡では、平成 9 年に和歌山市教育委員会によって宅地造成に伴う第 1 次調査が行われている。この調査では鎌倉時代の溝や土坑が検出され、また出土遺物としては弥生時代前期の甕形土器片が出土しており、遺跡の形成時期は弥生時代前期に遡る可能性が指摘されている。

また周辺の遺跡には、和泉山脈南裾部に沿って東から木ノ本Ⅲ遺跡、木ノ本Ⅱ遺跡、木ノ本Ⅰ遺跡、西庄Ⅱ遺跡、西庄遺跡、磯脇遺跡などが東西に連なり、そのうち木ノ本Ⅲ遺跡の範囲内には、釜山古墳・車駕之古址古墳・茶臼山古墳で構成される釜山古墳群が含まれている。そのほか、西庄Ⅲ遺跡では弥生時代後期の竪穴住居1棟、古墳時代前期の竪穴住居4棟のほか、周囲に溝を巡らした掘立柱建物23棟以上で構成される中世の屋敷地が検出されており、また西庄遺跡は県内最大規模の製塩遺跡として知られている。

#### 調査内容

今回の調査は、造成工事計画範囲約 2400 ㎡を対象に東西約 2.5 m、南北約 11 mのトレンチ調査区を8ヶ所設定して行った。基本層序は、まず調査地全体に現代の耕作土である第1・2層が堆積している。第1・2層下は、第1・4区の調査区中央部やや北寄りを東西に横断する石垣を境と



調査位置図

してその様相が大きく異なる。この石垣は近現代 の構築とみられるもので、石垣以南における第 1・2層下の状況としては、石垣構築以前に当調 査地周辺から採取したとみられる砂岩円礫を用 いた整地礫層が堆積している。この整地礫層は厚 さ  $0.5\sim1.5$  mを測るもので、礫層中から江戸時 代後期末の肥前系陶器が出土した。また石垣以北 では、この整地礫層の上部に近代の耕作土とみら れるにぶい黄褐色の粗砂 (第3層) が堆積してい る。さらに第4層は、整地礫層の下層に堆積する 5~20 cm大の砂岩円礫を多く含む灰黄褐色の粗 砂である。この第4層上面は、第1・4区におい て鎌倉時代の土坑などを検出した遺構検出面で ある。第4層下の状況としては、石垣以北・以南 ともに砂礫の互層(第5~8層)となり、今回の 調査ではこれらの各層には遺物が認められず、自然 堆積層と考えられる。

今回の調査では、第1・4区石垣北側の第4層 上面において鎌倉時代のものとみられる土坑2 基を検出した。土坑1は、第1区の北東隅部において検出したもので、東西に長い楕円形状を呈するものである。土坑2は、第4区の北西隅部において検出したもので、最下層において湧水が認められることから素堀りの井戸の可能性がある。

遺物は、遺構覆土や遺物包含層から収納コンテナ1/3箱分が出土した。これらの遺物には土師器・須恵器・瓦器・中世土師器・国産陶磁器などがあるもののすべて小破片である。

#### まとめ

平の下遺跡における第1次調査成果から、今回の調査地である第1・4区の北側には鎌倉時代の集落が存在するものと考えられる。また近代に構築された石垣の南側一帯にみられる整地礫層については、江戸時代後期末以降の土地利用の在り方として注目される遺構と考える。(藤藪勝則)



第1区 全景(北から)



第1区 調査区東壁土層堆積状況(西から)



第4区 全景(北から)



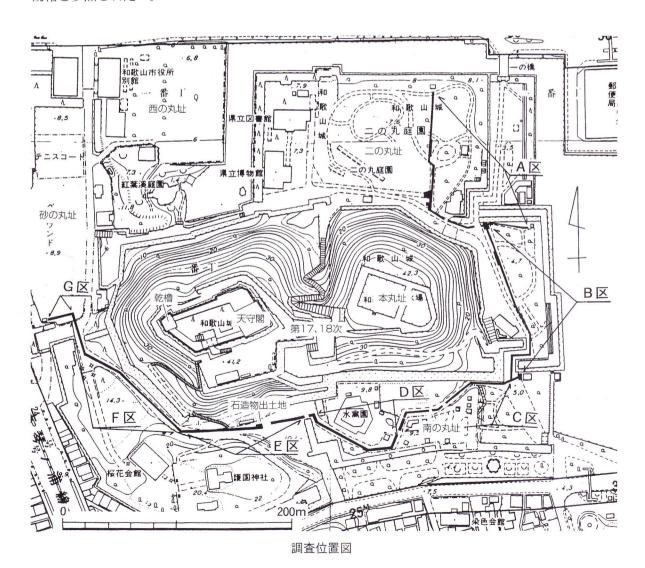
第4区 土坑2土層堆積状況(南から)

## Ⅲ. 遺物整理報告等

## 1. 史跡和歌山城第12次調查

#### 調査の概要

和歌山城の創建は、天正 13 (1585) 年で、藤堂和泉守高虎らが、普請奉行を勤めたと伝える。 豊臣秀長が領有したが、大和郡山に在城し、城代として桑山重晴を置いた。しかし創建当初の縄張りなどの史料は、ほとんど残されていない。また創建以前についても同様である。史跡和歌山城第 12 次調査は和歌山城の北東端の二の丸庭園から城の東側を通り表坂の東側、さらに中御門址を通り南の丸址、南仕切門址、砂の丸址に至る総延長約 700 mを 7区 (A区~G区) に分け、平成 5 年 5 月から約 6 ヶ月の期間で実施した。対象面積は 967 ㎡である。この調査成果は平成 6 年 3 月刊行の『史跡和歌山城 第 12 次発掘調査概要報告書』によって報告されているが、未掲載であった遺物の一部を追加資料として報告する。今回の報告対象は出土遺物のうち和歌山城築城(天正 13 (1585)年)以前の遺物及び刻印のある近世・近代瓦についてである。なお、調査の詳細に関しては既刊の概報を参照されたい。



- 26 -

#### 出土遺物

#### (1) 和歌山城築城以前

和歌山城築城以前の出土遺物について、その概要を箇条書きで示す。

古墳時代のものでは須恵器の杯身・壺・甕、 土師器は器種不明品が、B区とC区から出土し ている。

瓦器椀 (鎌倉時代) はA区で1点出土。

中世土師器は皿と堝がA区~G区全域でみられる。

瓦質土器は火鉢1点と器種不明品が1点、B 区で出土している。火鉢は二次焼成を受けてい る。

中国製陶磁器は、青磁盤1点、白磁皿4点、 染付皿1点、がA・B・C区で出土。

備前焼は大甕がA・B区で5点、擂鉢がA・B・C区で2点出土、その他器種不明品がA区で2点出土している。

丹波焼擂鉢はC区で1点出土。

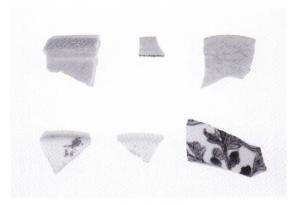
瀬戸美濃系陶器は、菊皿がC・D区でそれぞれ1点出土。

塼瓦はC区で1点出土。二次焼成を受けて赤変したものである。

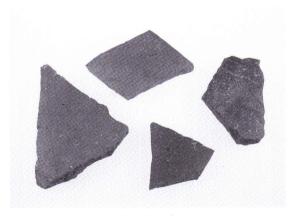
石造物はE区において組合式五輪塔の火輪1点、水輪1点、地輪3点出土している。火輪の中央部には「【(ラ)」、地輪のうち1点の中央上部に地を意味する「【(ア)」が刻まれていた。また、残りの地輪2点には、砥石に転用された痕跡を確認した。また埋込式石仏は3体出土している。阿弥陀座像が2点、供養者像のものが1点である。これらは中世末頃のものとみられ、一括出土している。



古墳時代の遺物



輸入陶磁器



備前焼大甕



備前焼擂鉢・丹波焼擂鉢

銭貨は残欠 1 点であるが、直径  $2.3~{\rm cm}$ 、厚さ  $0.15~{\rm cm}$ を測る銅銭である。「 $\Box\Box$  通寶」と読め、その字体などから宋銭と考えられる。 A 区で出土した。

#### (2) 刻印を有する近世・近代の瓦

瓦の刻印を5種類確認することができた。刻印の内訳は、文様3種類と文字2種類である。このうち、近世のものは、軒平瓦、丸瓦、隅平瓦にみられ、刻印は文様のみで、菊花・三日月・〇の3種類がある。軒平瓦にはその3種類全て、丸瓦には菊花、隅平瓦には三日月がみられる(一覧表参照)。

近代のものは文字のみで、二次焼成を受け赤変した平瓦に「登録商標(菊花)泉州 谷川瓦株式會社 □□□□□」、同じく赤変した隅平瓦に「泉州谷川瓦 池田政」の刻印がみられる。これらは泉州谷川産のものであり、A区から出土した。



出土地区 瓦種類	A区	B区	CK	種 類 別合計点数
軒平瓦			1	1
丸 瓦	3	1	2	6
平 瓦	1			1
隅平瓦	2			2
地区別合計点数	6	1	3	10

#### 種類別刻印瓦一覧表

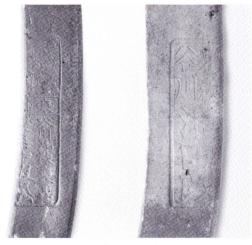
王がかられて	JE IC				
刻印種類 瓦種類	菊 花	三日月	0	文 字	種 類 別合計点数
軒平瓦		1			1
丸 瓦	2	1	3		6
平 瓦				1	1
隅平瓦		1		1	2
地区別合計点数	2	3	3	2	10



銭貨



塼



「谷川産」刻印瓦

#### まとめ

古墳時代の須恵器・土師器はB区とC区で出土しており、鎌倉時代の瓦器椀はA区で出土した。 これらの古墳時代や鎌倉時代の遺物は限られた地点でみられるといえる。

中国製陶磁器や備前焼など  $15 \sim 16$  世紀の遺物はA区からG区全域にわたってみられる。しかし詳細に出土分布をみた場合、全域にみられるものは中世土師器に限られる。それ以外の遺物でみた

出土地区別遺物分布一覧表

出土地区 遺物種類	A区	BK	C区	D区	EΣ	F区	G区	遺物種類別合計点数
土師器		1						1
須恵器		4		2				6
瓦 器	1							1
中世土師器	11	7	7	1	1	28	21	76
瓦質土器		2						2
中国製陶磁器	2	1	3					6
備前焼	4	4	1					9
丹波焼			1					1
瀬戸美濃系陶器			1	1				2
瓦			1					1
石造物					8			8
銭 貨	1							1
地区別合計点数	19	19	14	4	9	28	21	114

場合、中国製陶磁器はA・B・C区、備前焼大甕はA・B区、備前焼擂鉢はA・B・C区、丹波焼擂鉢はC区、瀬戸美濃系陶器はC・D区、塼瓦はC区、石造物はE区で出土したという様に分布には偏りがみられる。

以上、一定量みられる  $15 \sim 16$  世紀の遺物は $A \sim C$ 区に集中していることから、その周辺に当該期の集落などの遺構が存在していた可能性がある。また、石造物はE区に限ってみられることについて、第  $17 \cdot 18$  次調査地から石造物が出土していることや天守台石垣に石造物が多く転用されていること、昭和 32 年 6 月の天守再建工事時に乾櫓下から「永和丁巳(3 年)十一月口日」銘口為随性大徳三十三年と記された供養石塔が出土し、数体の石仏が発見されている。また「天正七年三月廿五日」銘の瓦製分銅も出土していることなどから考えて、山頂部からE区にかけての丘陵南斜面に中世墓地が形成されていた可能性があるといえる。 (奥村 薫)

#### 【参考文献】

『史跡和歌山城 第12次発掘調査概要報告書』 財団法人 和歌山市文化体育振興事業団 1994年 『史跡和歌山城石垣保存修理報告書』 和歌山市産業部 和歌山城管理事務所 1999年 『谷川瓦調査報告 I 』 岬町教育委員会・谷川瓦調査委員会 1992年

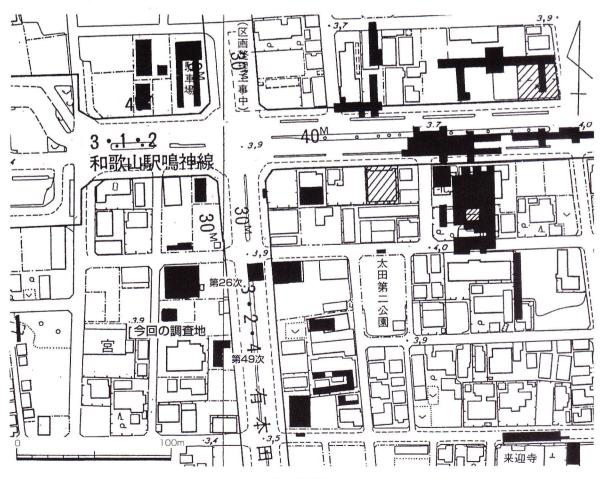
## 2. 太田・黒田遺跡 第53次調査

太田・黒田遺跡の調査について、第53次調査(和歌山市教育委員会実施)の内容が未報告となっているため、調査データの提供を受け、本年報に概略を報告する。

調査地周辺の既往の調査状況について、北側に隣接して第 26 次調査地、南東約 30 mには第 49 次調査地が位置する。第 26 次調査では弥生時代前期の環濠が検出されており、北東側が前期の集落内と考えられており、調査地周辺は環濠外に当たる。また、環濠は弥生時代中期初頭に埋没し、第 26 次調査地全面は中期中葉まで水田となっている。この水田埋没後、弥生時代中期後葉に南西から北東に流路方向をもつ溝が1条掘削されるが、一時埋没した後、古墳時代前期に再掘削され中期後葉まで継続して使用されている。第 49 次調査では古墳時代後期の土坑1基、溝2条、柱穴群を検出している。また、当該期の遺構から出土したものではないが、土師器・須恵器などの古墳時代中期から後期にかけての遺物がまとまって出土している。

調査は調査対象地(和歌山市太田 371 - 15 番地)の北側にトレンチ 1 として東西長約 3.0 m、南北幅約 1.5 m、南側にトレンチ 2 として東西長約 3.0 m、南北幅約 1.2 mの 2 ヶ所の調査区を設け、合計面積 8 ㎡について実施された。

トレンチ 1 では、厚さ約 80 cmの近年の整地土、約 15 cmの暗灰色土(旧耕土)、 $15\sim20$  cm の淡灰色粘質土を経て淡黄灰色砂質土となる。この淡黄灰色砂質土上面が古墳時代の遺構面(標高 2.64



調査位置図

m)で、さらに深さ約  $20~\rm cm$ で黄灰色砂質土となる。トレンチ  $2~\rm ct$  、整地土、暗灰色土(旧耕土)までの堆積状況はトレンチ  $1~\rm cm$  と同様であるが、淡灰色粘質土の厚みが  $20~\rm cm$  とやや厚く堆積している。その下は灰色砂質土が厚さ約  $15~\rm cm$  以上の堆積となる。トレンチ  $1~\rm cm$  次黄灰色砂質土が約  $15~\rm cm$  以上の堆積となる。トレンチ  $1~\rm cm$  次黄灰色砂質土上面で検出した遺構は、トレンチの南東隅にみられる土坑  $1~\rm ct$  、トレンチ北東隅から南西隅にかけて検出した溝  $1~\rm ct$  がある。溝  $1~\rm ct$  は東北東から西南西の方向に走り、

上面の幅約60 cm、深さ約30 cmの規模を測り、延長約3.1 m分を検出した。遺物は土師器甕・

高杯、須恵器杯蓋・甕・高杯、馬歯などが出土した。土坑1は淡黄灰色砂質土を切り込んで緩やかに落ち込み、トレンチ隅で急に深くなる。最深部で深さ約40cmを測り、溝1よりも新しい時期のものである。弥生土器、須恵器甕などが少量出土した。トレンチ2では遺構を検出していない。

この調査で古墳時代の溝を1条、土坑

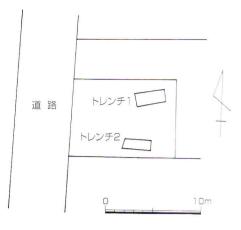
を1基検出しているが、溝の走行方向が第26次調査で 検出した溝とほぼ一致する点を指摘することができ る。また、第49次調査で古墳時代後期の土坑や溝な どの遺構が検出されていることや古墳時代中期から 後期にかけての遺物がまとまって出土していること などから、本調査地周辺は古墳時代の集落が展開して いたものと考えられる。

#### 【参考文献】

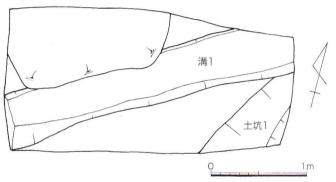
『太田・黒田遺跡第26次発掘調査概報』

財団法人和歌山市文化体育振興事業団 1995 年 『太田・黒田遺跡第 49 次発掘調査概報』

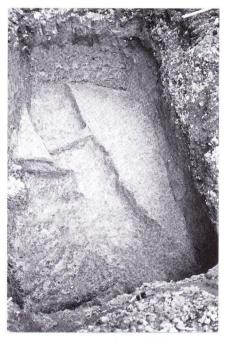
財団法人和歌山市文化体育振興事業団 2002年



調査地地区割図



トレンチ1 遺構平面図



トレンチ1 全景(西から)

## Ⅳ. 普及啓発活動

#### 1. 書籍刊行

埋蔵文化財の発掘調査報告書を刊行し、関係機関等へ配布した。

第40集 『井辺遺跡 第7次発掘調査概報』

(平成18年3月)

発掘調査報告書の編集を行った。

『和歌山市内遺跡発掘調査概報』 - 平成 16 年度 - (平成 18 年 3 月) 和歌山市教育委員会発行

#### 2. 報告会等の開催

発掘調査を行った地区で調査報告会を実施した。

『スライドで見る井辺遺跡発掘情報』

平成17年9月4日 井辺地区公民館

#### 3. 速報展等の開催

和歌山市立博物館と共催で速報展を実施した。

『発掘・発見!和歌山市-第6回和歌山市埋蔵文化財速報展-』 平成17年4月23日~6月5日 和歌山市立博物館 特別展示室 速報展に伴い調査報告会を行った。

『ミュージアムトーク「スライドで見る和歌山市最新発掘情報」』 平成17年5月14日 和歌山市立博物館 講義室

平成20年2月12日

## 和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報

一平成17年度(2005年度)

編集・発行 財団法人 和歌山市都市整備公社

和歌山市西汀丁36番地

印 刷 株式会社 ウイング

© 財団法人 和歌山市都市整備公社